

空襲を受けた京都 京都は空襲を受けなかったという伝説めいた話が今も残るが、事實は異なる。昭和二十年（一九四五）一月十六日の未明、東山区馬町に最初の空襲があり親子爆弾投下による総計二十数名の死傷者と建物倒壊被害が出ている。

大本京都東山支部長（平成十六年現在）の西出聖一郎は、その証人の一人である。当時住んでいた四軒棟割長屋の隣の一軒に爆弾が命中し長屋が倒壊した。西出は建物の下敷きになったが、掘り出されて隣家の少女も共に近くの小学校校庭に搬送されている。この少女は頭部致命傷により死亡し、西出は気を失っていた状態から蘇生して助かった。

この話には不思議な縁につながる後日談がある。空襲の日から半世紀余りが経過した平成十一年（一九九九）、西出は地元信用金庫主催の親睦旅行に参加した。旅行先の石川県和倉温泉で偶々同室たまたまになった十歳ばかり年長の男性鈴鹿某氏と懐旧談に耽ふけるうち、そのときの空襲の話になる。前後の状況があまりに符合することから、鈴鹿氏こそ馬町の爆撃現場に駆けつけ西出の救出に当たった、烏丸五条の警防団員その人であったと判明したのである。西出にとっては、空襲から五十四年の後に発見した救命現場での直接の命の恩人であった。京都は敗戦までに計五回の空襲被害を受けたが、国民への心理的影響を配慮し秘せられた。

同じ年、昭和二十年、京都で学童疎開が始まる。本部教務局次長（平成十六年現在）、京都霊水支部長（同年現在）を勤める平野清享も、その学童疎開をした一人である。昭和二十年四月、京都朱雀第四国民学校五年生になり、四年生から六年生まで約六十人が綾部へ疎開した。内二十人が本宮山麓の正暦寺へ世話になる。残りは市内の花月旅館と黒住教会に分宿した。

平野は、寄宿先の正暦寺から現在の長生殿博約館辺りにあった綾部国民学校の教室に通ったが、おやつは大豆

の煎つたものが猪口一杯分くらいしか当たらなかった。山麓の桑の実をもぎ取って食べたことまで覚えている。疎開は一学期中続き、敗戦の混乱も重なったので京都市内の自宅に帰ったのは九月初めであった。

中学生・女学生は軍需工場に動員され銃や飛行機の部品製造に従事した。学校のミシンを使って軍服も縫った。中学校在学中に志願することを賞揚されて少年航空兵が漸次増加した。兵器工場では空襲による死者も出た。国内全体で国民学校高等科から大学まで男子一七八万人、女子一三三万人の学徒が工場に動員され、うち一万人以上が戦没している。

沖縄・広島・長崎そして敗戦 昭和二十年四月、アメリカ軍が沖縄に上陸し激戦が展開された。日本は特攻作戦のほか一般住民も動員して抵抗した。男子中学生は「鉄血勤皇隊」、女子学生は「ひめゆり部隊」などと名付けられた看護部隊として戦争に参加し、二か月足らずの戦闘で日本軍兵士十万人と民間人ほぼ同数が命を失い、沖縄は完全に制圧されてしまった。

原爆投下 昭和二十年八月六日、広島にアメリカの原子爆弾が投下された。被害範囲約三十平方キロ、直接の死者一四万人、その後の放射能被害による死者を加えると二十五万人を超えた。

八月九日、アメリカの二発目の原爆が長崎に投下され、死者は七万人以上に及んだ。同じ日、日本が連合国側との戦争終結の仲介をひそかに依頼していたソ連が、日本との中立条約を破棄、対日宣戦布告して満州に攻め込んだ。

二度に及ぶ原爆投下が、戦争遂行能力をほぼ失っていた日本に集中したのは、米ソの覇権争いが激しくなったこともあるが、白色人種対有色人種間の根深い差別感情が背景にあったとみられる。